



2002年3月
Vol. 11



安行八景 (その六)

蛇づくりと地蔵さん 《川口市大字安行原》

大きなケヤキ（現在は鉄骨やぐら）の上にとぐろを巻く、
五穀豊穣、天下泰平、無病息災の願いをこめたワラの大蛇。
毎年5月24日に作られる。

川口市保存樹木を訪ねて その11

峯八幡神社の タラヨウ

(川口市大字峯1304)

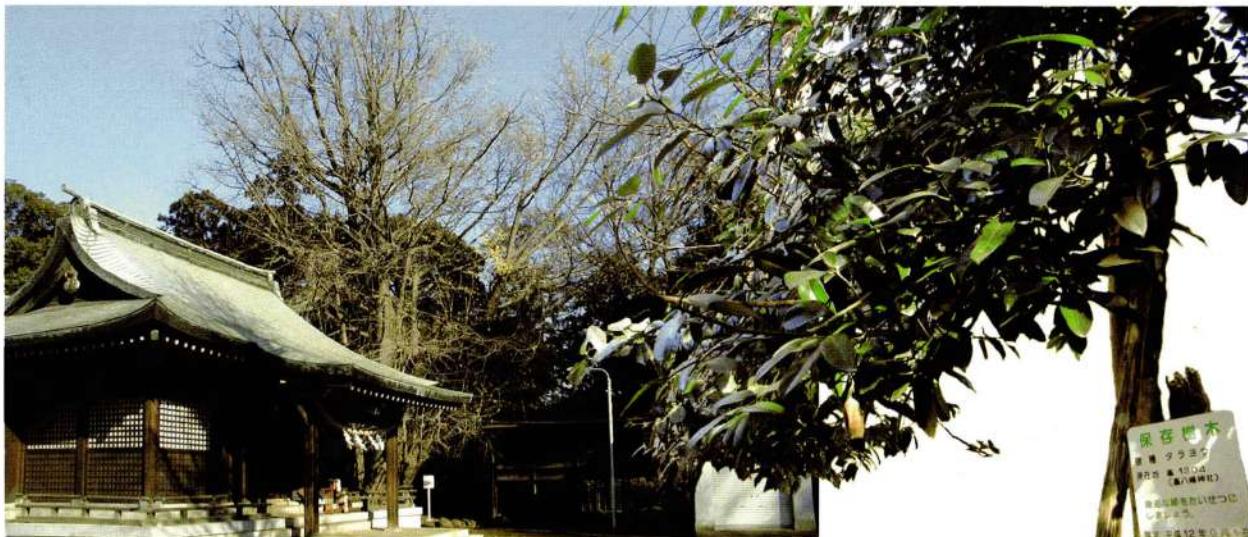
平成13年の年の瀬もいよいよ迫ってきた12月19日、タラヨウを取り材に峯八幡神社を訪れた。石段を登り詰め鳥居をくぐる。春日燈籠が左右に並ぶ。門をくぐりぬけると正面に本殿が見える。

静まり返った境内、生氣みなぎる張りつめた空間。晴天、抜けるような青空。気温5℃、吐く息は白。境内を黙々と掃き清め

る白装束のご婦人一人。本殿の屋根よりも高く、鬱蒼とした木立が取り巻く。

本殿の前を右側に歩く。教育委員会が記した「川口市指定天然記念物峯ヶ岡八幡神社の社叢」の銘板がある。近くに市指定の保存樹木2種類がある。イチョウとタラヨウ。どちらも落雷の傷跡が鮮明に残り、凄さをいっそう増している。大木、古木は種類を問わず、その前に立つだけで、身が引き締まる。見る者は圧倒され感銘を覚える。荘厳な生命のドラマが凝縮されているからだろうか。

落雷に耐えて命のタラヨウを
かざひ
はぐくむ冬の風陽ざしあり



川口市指定天然記念物 峯ヶ岡八幡神社の社叢

【昭和51年2月19日】

この神社の森は、シイ、シラカシ、タブノキなどの大木が多く、川口の自然植生である照葉樹林のおもかげを濃く残している社叢です。

境内にあるケヤキ、シイ、タラヨウ、イチョウは、市の保存樹木にも指定されており、この他にムクノキ、スギなどの大木もあります。特に社殿右手にあるイチョウは、目通り（地上より1.5mの高さの幹周）8m、

推定樹齢600年という県内有数の巨木です。また、大木の幹にはノキシノブが着生し、林内にはムラサキシキブ、ガマズミなどの低木やベニシダ、ヤブミョウガ、ノブキなどの草本が生育しています。

この社叢は、峯ヶ岡八幡神社の歴史的意味も含めて、川口の本来の自然を伝えるものとして保存的価値が高いと思われます。

川口市教育委員会

タラヨウ *Ilex latifolia* Thunb. モチノキ科

- 分布：本州（静岡県以西）・四国・九州の常緑樹林内に生え、中国中部にも分布する。
- 高さ7~10mになる常緑高木。
- 雌雄異株。

4~5月頃に開花、淡黄緑色の小さい花をつける。

10~12月に熟す赤い果実が美しく、古くから庭園、特に寺社によく植えられる。

エカキバ、ハガキノキ、ジカキシバなどの呼び名もある。葉の長さ10~20cm、幅4~8cm
葉の表は光沢のある深緑色、裏は黄色がかった淡緑色、厚みがある。葉の裏をとがったものでキズつけるように文字や絵を書くと、黒く浮かび上がってくる。



峯八幡神社の保存樹木

樹種	科名	指定年月日	指定番号	所在	幹周	樹高
イチヨウ	イチヨウ	S.51.2.20	5	峯1304	8.0m	27.0m
スダジイ	ブナ	S.51.2.20	6	峯1304	6.1m	17.5m
タラヨウ	モチノキ	S.51.2.20	7	峯1304	2.2m	14.0m
ケヤキ	ニレ	S.51.2.20	8	峯1304	3.9m	27.0m

植木の里「安行」散歩道

「ふるさとの森」に育む一輪草

都市部での自生地としては珍しいイチリンソウを安行の地で見ることができる。7年前、植物専門家により安行一帯の植物調査が行われた。イチリンソウの自生地が確認された。

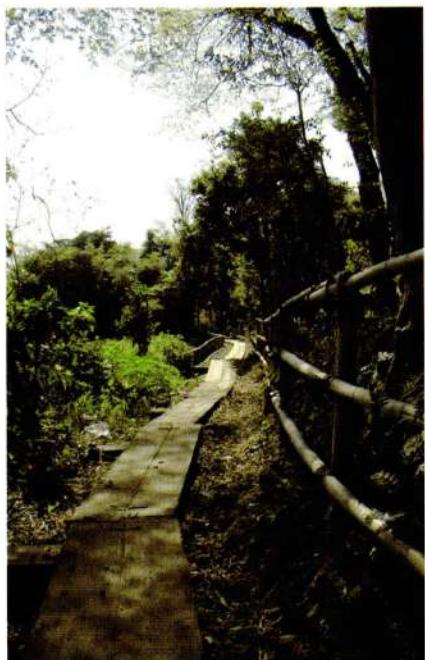
「安行みどりのまちづくり協議会」(小林進会長)と「安行まちづくりを考える会」(中山謙二郎会長)会員の並々ならぬご努力でイチリンソウが保護され群落迄に繁殖した。竹垣で囲まれた約1,000m²の区域には一面イチリンソウの絨毯じゆうたんでおあわれた感がある。昨年、初めてTV・新聞等のマスコミで紹介され、多くの人が訪れた。

樹里安から西に向かって5分足らず。赤堀用水に突き当たる。用水沿いを南に向かって2~3分。「一輪草自生地入り口」と書かれた小振りの木製看板が川口市掲示板脇に控え目にある。さあこれからイチリンソウに会える。そんな気持ちにさせてくれるような一本の細い山道が迎えてくれる。50mほど歩く。「自然の森」と書かれた大きい木製看板がある。斜面の雑木林が目前に広がる。なにやら懐かしく、そして心やすまる風景である。

誘導看板に従って左に折れる。黒土の感触が心地よい。途中から木道になる。時折竹筒で導かれた湧き水が顔を出す。左に植木畠、右に雑木林。コナラ、ミズキ、イヌシデ、ケヤキ等の落葉樹。スダジイ、シラカシ等の常緑樹。下草にはリュウノヒゲ、ベニシダ、スミレ等が見られる。

100m余りも歩くと、ひときわ明るい空間が現れる。イチリンソウの白い花が飛び込んでくる。気品ある清楚なたたずまいが見る者の心を打つ。静寂なときが刻まれていた。

(訪れる人は、マナーを守って優しい気持ちで応援して下さい。)



自然に囲まれた木道



見頃は4月中旬頃



イチリンソウ <一輪草>

キンポウゲ科 *Anemone nikoensis* Maxim.

特徴 ★ 別名：イチゲソウ

山林の明るい草地に自生する多年草。

一茎に一個の花が咲くところからその名がある。

高さ15~25cm、根葉は複葉でニンジンの葉のように深く切れ込み、暗緑色で白い斑点がかすかに入るものが多い。

花は白色五弁で、花弁の裏側が淡紅色を帯びることが多い。

根葉：根から束生したように見える葉。きわめて短い茎に多数の葉が地に接して着く。タンポポの類。根出葉。根生葉。

★ 落葉広葉樹林の林縁や林床、ときには草原にもはえる多年草。

根茎は横にはい、所々紡錘形にふくらみ、しばしば匐枝を出して群生する。

葉や茎は早春に地上に現れ、初夏に枯れる。

根出葉は花茎を出さない根茎の先に生じ、ふつう花茎の基部にはつかない。

4~5月頃、径4cm位の花を1個、花茎に頂生する。

萼片はふつう5~6枚、橢円形で白色、裏面はふつう紅色を帯びる。

そう果は多数、狭卵形で細毛がある。

根出葉は1~2回3出複葉で、小葉は羽状に深裂し、裂片は欠刻する。

花茎は高さ20~30cm、茎葉は3枚が輪生し、多少鞘状に広がった葉柄がある。



化石から発見された メタセコイア

中国原産の落葉性針葉高木。スギ科。化石植物として有名。メタセコイアが生きた植物として発見されるまでの過程は興味が尽きない。

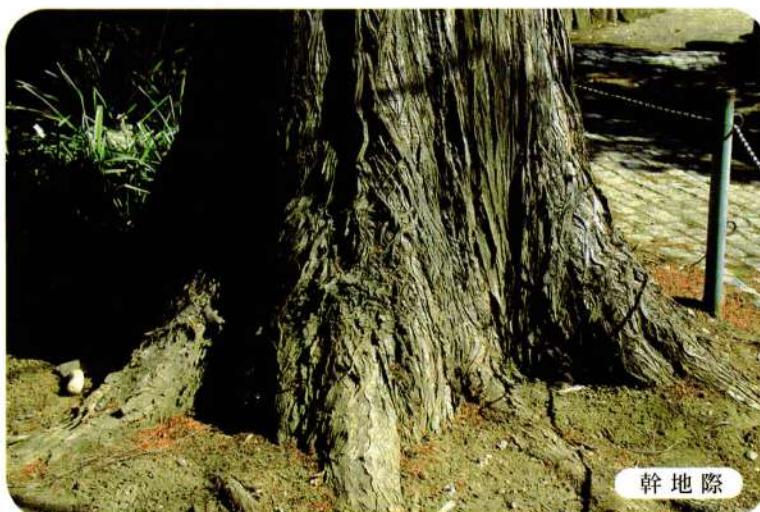
1941年（昭和16年）に三木茂博士（1901~74）によって化石に基づいて絶滅した新属として発表され、その後1945年（昭和20年）に生きている個体が発見され翌年発表された。『生きている化石植物』と騒がれた。それは日本の化石学の優秀性を立証したことにもなった。

永く日本の植物遺体の研究を続けた三木茂は、1941年にスバルバル諸島産の化石種 *Sequoia disticha* O. Heer に近縁のものが日本にもあることを認め、それらが対生葉を持つ点に着目して「葉が互生のセコイア属」から分け、別属 *Metasequoia*（メタセコイア）を立てた。その後、1945年中国四川省の長江（揚子江）支流磨刀渓の奥地で、林務官王戦は祠の神木となっている見知らぬ針葉樹の大木を見た。樹の名はわからなかった。標本を送られた南京大学の鄭博士は三木茂が発表した文献とともにメタセコイアと同定し1946年（昭和21）に発表した。

1949年（昭和24）にアメリカで育てられた実生苗が天皇陛下に献呈された。苗の大きさ37cmであった。日本に伝えられたメタセコイア第一号は皇居内に植えられた。

今では、植物園・学校・公園などで大木になったメタセコイアを目にするようになった。

[写真は川口市立グリーンセンター]

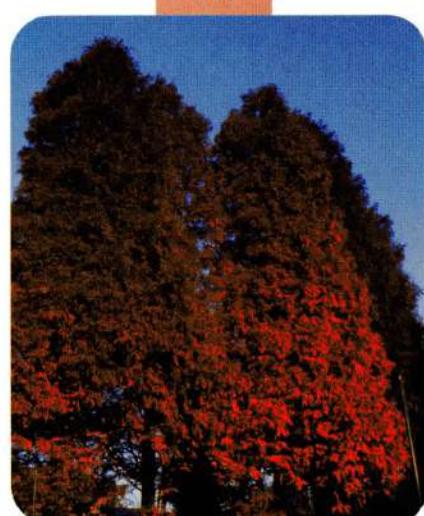


幹地際

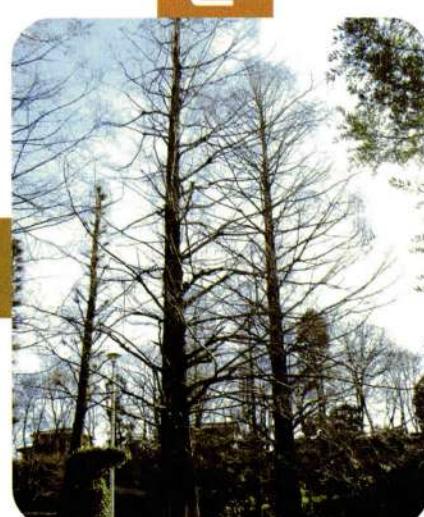
春



秋



冬





川口緑化センターの主なイベント（結果報告）

■ 経営改善講習会 平成14年1月10日（木）

村井園芸コンサルタント所長（元深谷花植木センター所長）村井千里氏を講師に招き「これから園芸売店はいかにあるべきか」というテーマのもと講演会が開催されました。園芸の原点に立ち返り、「生命ある植物」「耕す・育てる」をキーワードに、示唆に富んだ話は、参加者をふるいたせっていました。



■ 春の草花によるコンテナガーデン講習会

平成14年2月2日（土）

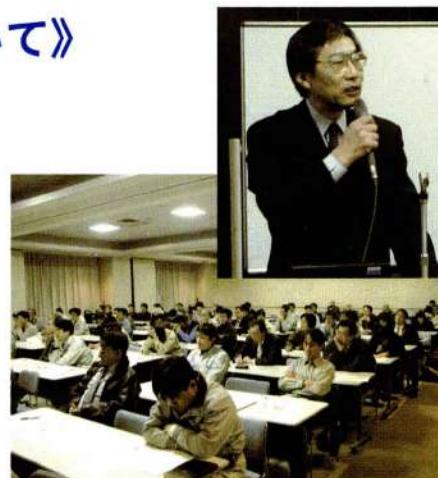
今年初めての園芸教室。カラフルなプラ鉢に草花とハーブの寄せ植え。ひと味違うのは、ワイヤーで蝶々を作り、鉢に挿し込んで飾りつける。蝶の羽の部分には、ピンクのスケルトンカラーリーフ（葉脈だけが残った葉：今回はマグノリアリーフを使う）を貼り付け、その上に分解したバラのつぼみの花弁一枚ずつを模様状に貼り付ける。受講者それぞれ異なった形の楽しい蝶が舞っていました。春の香り満載のコンテナガーデンが出来上がりいました。



■ 最新緑化技術研修会《屋上緑化について》

平成14年2月5日（火）

屋上開発研究会の前田正明氏と吉川和彦氏を招いて、いま最も注目されている「屋上緑化」についての研修会を開催しました。緑化産業に携わる90余人の参加を得て、屋上緑化への関心の深さを改めて認識しました。建物を緑化することにより、地球温暖化防止の一翼を担うこともさることながら、建物の付加価値が高められることが嬉しいことです。スクリーンに映し出された数多くの施工事例を基に、豊富な体験、研究をふまえての丁寧な話は大変参考になったことでしょう。



■ 花と緑の写真展 平成14年2月6日（水）～13日（水）

作品には「植物って」、「自然って」これほどまでに美しいものだったのかと、鑑賞者を素直にさせる力がひそんでいるようです。

全日本写真連盟鳩ヶ谷支部による40点の作品など、多くの秀逸な写真が集まりました。2月としては暖かな日和の中を、多数の来場者が堪能していました。





植物・園芸用語解説 シリーズ11

☆ カタログ：種苗会社が発行している植物目録。有料、無料それぞれあるが、園芸書同様に詳細に書かれており、また、カラー写真の充実したものなど、見ていて楽しい。

☆ 炬燵園芸：こたつえんげいこんな言葉があったのか。園芸趣味家が、各種カタログを取り寄せ、文字通り炬燵に入り込んでミカン片手に、春から始まる園芸の青写真に夢を馳せること。至福の時である。

☆ 縁起植物：えんぎしょくぶつ幸運をもたらすといわれる植物。松・竹・梅はめでたい植物の代表格です。桃は三月三日が桃の節句といわれるほど日本の家庭に親しまれている。

語呂合わせ的な縁起植物として、『難を転ずる意のナンテン』、『カシの木を屋敷の四隅に植えて、四方貸しだらけ』『万両（マンリョウ）、千両（センリョウ）、百両（カラタチバナ）、十両（ヤブコウジ）、有りどおし（アリドオシ）』など、植物と人間の関係の深さが見られる。

☆ 干支植物：えとしょくぶつ干支十二支にまつわる植物のこと。園芸誌正月号には、よく干支にかかわる植物が紹介される。さしづめ今年の干支は午（ウマ）なので、ウマの文字が付く植物が誌面を飾ることでしょう。例えば、馬酔木（アセビ）ウマグリ（マロニエ）、馬鈴薯（ジャガイモ）、駒草（コマクサ）等がある。

☆ 寒 肥：かん ひ万物皆、冬空の下で、じっと春の来るのを待ちわびている。そんな折りに植物へ施す肥料のこと。春、植物が活動を始める頃、肥料効果がある。油粕、骨粉などの有機質肥料が適している。

☆ 春植球根：はるうえきゅうこん春から夏に成長、開花して秋に成熟する球根植物。また、耐寒性があまりない種類も、冬は保護しておいて春に植える。亜熱帯や熱帯に原産する寒さに弱い球根植物の場合、春に球根を植えつけて高温期に成長し、夏から秋にかけて開花する球根植物のこと。アマリリス、グラジオラス、ダリア、カンナ、カラジューム、球根ベゴニア等。

☆ 株分け：かぶわけ植物の繁殖法の一つ。親株の根元から出た幼苗を親から切り離して一個体とすること。または、一つの株をいくつかの株に分けて殖やすこと。種子繁殖と違って、親の形質をそっくり受け継ぐことができる。

☆ 芽分け：めわけ株分けの一種。

☆ 休眠：きゅうみん種子や芽が発芽、生長しないこと。

☆ 休眠打破：きゅうみんたは種子や芽が休眠から覚めて、発芽能力を持つようになること。特定の温度を受けて初めて休眠打破する種類が多い。



ジュリアン 樹里安
川口緑化センター・道の駅「川口・あんぎょう」
発行日：平成14年3月1日
発行：財団法人 川口緑化センター
〒334-0058 川口市安行領家844-2
TEL.048-296-4021
ホームページ：<http://www.sainet.or.jp/~jurian/>